

対照研究について考えておくべきこと

井上 優

要 旨

この文章では次のことを述べる。①言語の対照研究は、言語研究の一分野ではなく、言語を研究する際のスタイル・立ち位置である。②他の言語と比べて考えることは、対照研究だけでなく、個別言語研究においても重要である。③日本語研究の立場から対照研究をおこなうことは、日本語研究者の役割の一つである。④おもしろい対照研究にするためには、「何が問題の本質か」を常に考えながら研究をおこなうこと、そして、ふだんから異なる言語の研究者と直接話をしながら研究をおこなうことが重要である。⑤言語を比べて考えることは言語について分析的に考えるセンスを磨くのに役立つが、学生（特に留学生）が対照研究を研究テーマにするのがよいかどうかは、それとは別に考える必要がある。

キーワード

対照研究, 対照言語学, 個別言語研究とのコミュニケーション, 言語学の教育

1. はじめに

筆者が最初に書いた言語の対照研究の論文は、日本語と中国語の真偽疑問文について論じた井上・黄(1996)である。この論文のもとになった口頭発表をおこなったのは、1994年秋に山口大学で開催された国語学会（現在の日本語学会）秋季大会であるから、筆者が対照研究をおこなうようになって20年たったことになる。

この間、中国語・韓国語を母語とする日本語研究者や日本語を母語とする中国語・韓国語研究者と議論をしながら、いくつかのテーマについて、日本語と中国語、日本語と韓国語の対照研究をおこなってきた。また、各地の大学や講座で対照研究について講義をしたり、対照研究をおこなっている大学院生（多くは中国・韓国からの留学生）と話をしたりする機会にも恵まれた（一橋大学大学院言語社会研究科第二部門連携教授としての経験もここに含まれる）。この文章では、それらの経験の中で考えたことをふまえ、①言語の対照研究に対する筆者の基本的なスタンス（第2節～第4節）、②対照研究をおこなうために本質的に重要なことがら（第5節、第6節）、そして、③言語学の教育における対照研究の位置づけ（第7節）について述べる。

2. 対照研究とは何か

石綿・高田(1990)は、言語の対照研究について次のように述べている。

対照言語学は言語と言語の対照研究を通じてそれぞれの言語の特性を明らかにし、また言語の本質を考えようとする言語学の一分野である。(まえがき)

このうち、「それぞれの言語の特性を明らかにする」、「言語の本質を考えようとする」という部分は、対照研究の意義と役割を的確にとらえた説明である。しかし、言語の対照研究を「対照言語学」という「言語学の一分野」とするのはいささか大げさな印象を受ける。実際は、言語の対照研究は「言語を研究する際のスタイル・立ち位置」程度に考えるのがよい。これは、井上(2001a)以来変わることのない筆者の基本的なスタンスである。

「〇〇研究」には、「日本語研究」「文法研究」のように研究の対象を表すもの、「実験研究」「計量研究」のように研究の方法を表すものなどがある。「対照研究」の「対照」は、言うまでもなく研究の方法である。言語の対照研究は「異なる言語を比較対照する」という方法による研究である。

研究方法には必ず目的がある。比較対照の場合、その主な目的は「他を鏡にして、ある物事が持つ特徴やその特徴が持つ意味を具体的にとらえる」ことにある。具体的には、次の三つのことが言える。

第一に、「比べる」ことは「よく観察する」ことにつながる。我々は「一見同じように見えるが、よく見たら違う」、「一見違うように見えるが、よく見たら似ている」ということをしばしば経験する。買い物するときも、複数の商品をさまざまな角度から比較して、それぞれの特徴をくわしく知ろうとする。

第二に、「比べる」ことは「重要な特徴を際立たせる」ことにもつながる。我々は「我々が若いころは…だったが、今の若い人は…」、「日本人は…だが、中国人は…だ」のように、比較や対比にもとづいてものを言うのが好きである。比較・対比により、それぞれが持つ性質を明確に浮かび上がらせることができるからである。

第三に、「比べる」ことは「全体の中での位置づけを知る」ために必要である。試験では他の受験者の点数や平均点が気になる。悩み事相談では、同じ悩みを持っているのは自分だけではないことがわかって安心したりもする。いずれも、他と比較することにより、全体の中での位置づけを知ろうとしているのである。

比較対照が持つこのような意義は、言語研究においても同じである。日本語研究では、「と、ば、たら、なら」、「らしい、ようだ」のように、類似の性質を持つ表現の比較がよくおこなわれる。類似のものを比べることにより、各表現の特徴が具体的に把握できるからである。提題助詞「は」に関する議論は、格助詞「が」との比較という形をとることが多いが、これも両者を比較することにより「主題」と「非主題」、「有題文」と「無題文」の対立が明確に浮かび上がるからである。「〇〇表現の体系」というテーマの研究も、「〇〇表現」と呼ぶことができる表現を比較し、それぞれの位置づけについて考える研究と言ってよい。

言語の対照研究もこれと同じである。言語の対照研究は、異なる言語を比較対照するこ

とを通じて、「各言語についてよく観察する」、「各言語の重要な特徴を際立たせる」、「各言語の特徴を相対化するための一般的な観点を見出す」という三つのこと——一言で言えば「比べて考える」ということ——をおこなう研究である。石綿・高田(1990)の「それぞれの言語の特性を明らかにし、また言語の本質を考えようとする」という説明は、まさにそのことを指している。実際、個別言語が持つ性質の中には、他の言語と比較してはじめて明確に把握できるものが少なくない。個別言語に見られる現象が持つ言語学的な意味も、他の言語と比較してはじめて正確に把握できることが多い。異なる言語を比較対照し、各言語の現象を関連づけながら考えることは、言語研究において一定の意義を持つと言える。

しかし、そのことは、言語の対照研究が言語学の一分野をなすことを意味するものではない。対照研究は各個別言語の重要な特質の一端を明らかにすることはできるし、個別言語の体系を新たな観点から見直すことにつながることもあるが、個別言語のある体系（例えば文法の体系）の全体をとらえることは必ずしも指向しない。また、対照研究を通じて、言語の普遍性と多様性の一端を垣間見ることはできるが、通言語的研究のように「言語の普遍性と多様性」そのものを研究対象とするわけではない。〇〇語研究は「〇〇語論」、通言語的研究は「『言語の普遍性と多様性』論」であり、その意味で言語学の一分野と言えるが、対照研究はこれらの「論」の一端を担うだけであり、それ自体で何か「論」をなすわけではない。その意味で、言語の対照研究は「言語を研究する際のスタイル・立ち位置」という程度に考えるのが穏当である。

3. 「比べて考える」ことの重要性

言語の対照研究を「言語を研究する際のスタイル・立ち位置」という程度に考える背景には、もう一つ、他の言語と比べて考えることが、いわゆる「対照言語学的研究」に限らず、個別言語研究においても重要だということがある。ある言語について考える際に、他の言語に見られる現象やその言語の研究で得られた知見がヒントになることは多い。最近の日本語文法研究では、文法史と方言文法の研究に注目すべきものが多いが、これも古典語研究、方言研究が現代語・標準語との対照研究という側面を持ち、現代日本語（標準語）の研究で得られた知見がさまざまな形で活用されているということであろう。

筆者自身も、他の言語と比べて考えることが日本語について考える際の指針を得ることにつながることをしばしば経験している。例えば、日本語では「3時間待っていた」という表現がごく自然に成立するが、中国語では「3時間」のような動作の継続期間（時間の量的限界）を表す成分がある場合は、“等了三个小时”（等：待つ、三个小时：3時間）のように完了を表す“了”を用い、継続を表す“着”を用いて“*等着三个小时”のように言うことはできない。状態動詞を用いた「1年間北京にいた」も、中国語では“在北京 住了一年／呆了一年”（北京に1年住んだ／1年すごした）のように動作の完了として表現

する。中国語では時間的な限界を有する事象は完了表現を用いて述べるしかないが、日本語では必ずしもそうではないのである（井上・生越・木村(2002)）。このことは、日本語研究においても中国語研究においても説明を要することである。日中対照研究では説明が必要だが、日本語研究、中国語研究では説明しなくてよいというものではない。

もう一つ例をあげる。日本語と韓国語の過去形「た」「-ess-」にはともに「発見」的な用法がある（韓国語はYale式ローマ字表記）。

- (1) (名簿で井上の名前を探している)

えーと、井上、井上…、あった。(発見のタ)

- (2) (探しても見つからなかった傘が予想外の場所で偶然見つかった)

a! yeki iss-ess-ney.

あ ここにあった-気づき (伊藤(1990)の例文に文脈追加)

しかし、日本語文(1)と韓国語文(2)は意味が異なる。(1)で述べられているのは、「あるのが見えた」ということである。韓国語では、「あるのが見えた」という場合は「iss-ta」(ある)と言い、「iss-ess-ta」(あった)は使えない(井上・生越(1997))。

- (3) (名簿で井上の名前を探している)

えーと、井上、井上…、あった/iss-ta (#iss-ess-ta) .

ある あった

韓国語文(2)が表すのは、日本語文(4)に相当する意味である。

- (4) (探しても見つからなかった傘が予想外の場所で偶然見つかった)

あ、(本当は)ここにあったのか。(今まで気がつかなかった。)

この場合、発話時まで気づかなかった発話時以前の実情を過去形で述べることにより、発話時以前の認識を修正したことを表している。日本語だけ、韓国語だけを視野に入れた場合は、過去形の特定の用法を「発見」用法と呼び、「なぜ過去形が発見のムードを表すか」を考えることになる。しかし、この問題はむしろ次のように考えるべきである。

- (5) 日本語の過去形の発見用法は「あるのが見えた」という意味だが、韓国語の過去形の発見用法(と日本語の「~だったのか」)は「発話時以前の認識を修正する」という意味である。それぞれの用法はどのようなしくみに支えられているのか。

これは、日韓対照研究では問題にする必要があるが、日本語研究、韓国語研究では問題にする必要がないということがらではない。むしろ、日本語と韓国語を比べることが、日本語、韓国語について考えるための指針を提供しているというべきである。

このように、他の言語と比べて考えることは、個別言語研究における問題発見の手段、あるいは個別言語について考える際の指針を得るための手段として有用である。対照研究をおこなうかどうかに関係なく、他の言語と比べて考えることは、研究のヒントを得るための手段として活用すべきである。

4. 日本語研究者の視点からの対照研究

日本語と外国語の対照研究は、外国語を母語とする研究者あるいは外国語の専門家がおこなうことが多い。外国語に通じていないと対照研究はできないと思っている人も多い。しかし、対照研究のテーマはさまざまであり、テーマによっては、母語話者や専門家のようにはできなくても、それなりの対照研究はできる。

井上・黄(1998)を例に説明しよう。日本語の「 α は？」と中国語の“ α 呢？”（“呢 ne”は文末助詞）は、次の(6)、(7)では同じように用いることができる。

(6) a. ぼくはビールにするけど、君は？ [どうする]

b. 我 喝 啤酒， 你 呢？

私 飲む ビール あなた ne

(7) (昼寝をしていた子供が目を覚ましたところ、母親の姿が見えない)

a. ママは？ [どうした，どこ]

b. 妈妈 呢？

お母さん ne

(6)では、先行文脈でおこなった「人→飲むもの」という対応づけを「君」に適用するために、また(7)では、「いるはずの母親がいない」という状況で母親の現状について問うために、「 α は？」，“ α 呢？”が用いられている。

一方、次の(8)～(10)では、「 α は？」は使えるが，“ α 呢？”は使えない。

(8) a. あなたのご専門は？ [(あなたの専門であるのは) 何]

b. 你 的 专业 是什么？ (あなたの専攻は何？)

あなたの 専攻 だ 何

c. #你 的 专业 呢？

あなたの 専攻 ne

(9) (見たことがない料理を出されて)

a. これは？ [何]

b. 这 是什么 菜？ (これは何という料理？)

これ だ 何 料理

c. #这个 菜 呢？

これ 料理 ne

(10) (列車の脱線事故が発生したという通報を受けて)

a. ケガ人は？ [誰かいるか]

b. 有没有 受伤 的人？ (負傷した人はいるか？)

ある-ないケガしたの 人

c. #受伤 的人 呢？

ケガしたの 人 ne

「 α は？」の用法を観察し，“ α 呢？”に置き換えて中国語の母語話者に自然かどうかを聞けば，“ α 呢？”が(6), (7)のような場合にしか使えないこと、そして，“ α 呢？”は使えるが「 α は？」は使えないというケースはないことが確認できる。あとは次の三つの問題について考えればよい。

- ①「 α は？」と“ α 呢？”の(6), (7)の用法はどのような関係にあるか？
- ②「 α は？」の意味はどのように決まるか？
- ③「 α は？」と“ α 呢？”の相違はどのように一般化できるか？

①は単純に「どう説明するか」という問題であり、中国語の母語話者や専門家でなくても考察は可能である。②は日本語の問題であるから、日本語研究者であれば考察可能である。③も、①と②について考えれば結論が出る問題である。「 α は？」と“ α 呢？”の問題は、日本語に関する考察が相対的に重要なのであり、このような問題であれば、日本語研究者と（日本語に堪能で言語学的なセンスのある）中国語の母語話者の組み合わせで研究をおこなうことは十分可能である。井上・黄(1998)では、それぞれの問題について次のことを述べた。

- ①「 α は？」と“ α 呢？”の(6), (7)の用法は、「発話現場で実行している対応づけを α に適用する」と一般化できる。
- ②(8)~(10)の「 α は？」の用法は、「名詞句 α の意味的性質にもとづいて意味が決まる」と一般化できる。
- ③「は」は提題助詞であり、後に解説を要求する。対比の文脈で「 α は？」が用いられた場合は、発話現場で実行している対応づけの適用対象を提示し、解説を加えることを要求する。対比の文脈がなければ、名詞の意味的性質に応じて後に続く解説のタイプが決まる。一方、“呢”は文末助詞であり、“ α 呢？”も発話現場で実行している対応づけの適用対象を提示する機能しか持たない。

この研究に限らず、筆者がおこなった日本語と中国語・韓国語との対照研究は日本語に関する考察と密接な関係にあり、その意味で「日本語研究者の視点からの対照研究」と呼んでよいものである。日本語と中国語の真偽疑問文について考察した井上・黄(1996)は、日本語の「ないか」について考察した井上(1994)を基盤としている。日本語と韓国語の過去形の意味について考察した井上・生越(1997)も、日本語の「た」について考察した井上(2001b)と並行する形で研究がなされた。

対照研究については、個別言語研究をこえた「第三の観点」から対象言語を見なければならぬ（一方の言語の感覚で他方を見てはならない）ということが言われる。寺村(1982)も「対照研究がその言語の全体像をゆがめることがあってはならない」と述べている。しかし、これは「対照研究では最終的に第三の観点から対象言語を公平に見なければならぬ」ということであり、「第三の観点を準備してから対照研究をおこなう」ということではない。対象言語を公平に見るための第三の観点を見出すことは対照研究の目標であり、

出発点ではない。日本語研究者の視点からの対照研究は、日本語研究の立場から第三の観点を提案するものであり、そのような観点を提供することも日本語研究者の役割の一つと考えるべきである。

5. 「おもしろい」対照研究のために重要なこと

筆者にとって、日本語と中国語・韓国語の対照研究はとてもおもしろい。外国語である中国語・韓国語に対する素朴な疑問を出発点にできるし、中国語・韓国語と比べて考えると日本語のほうが不思議に見えてくることも多いので、研究テーマに困ることはない。また、比べて考える過程で、一つの言語を見るだけでは気づかないことがいろいろと発見できるので、日本語研究者だけでなく、中国語・韓国語研究者にもそれなりに興味を持ってもらえる。研究がうまくいった場合は、言語の普遍性と多様性の一端にふれたような気持ちにもなれる。

このようなおもしろさを感じることができるのは、何よりも中国語・韓国語を母語とする日本語研究者、日本語を母語とする中国語・韓国語研究者と気軽に議論ができる環境にあるからであるが、もう一つ、「おもしろいと感じられるやり方で研究している」ということもあると思う。

対照研究は複数の言語を研究対象にするため、個別言語研究とは問題意識や重点の置きどころが多少異なることがある。対照研究の発表に対しては、筆者などがそれなりにおもしろいと思うものであっても、「このように対照することにどのような意味があるのか」、「それぞれの言語についてもっと分析する必要があるのではないか」と言われることがある。日本語研究の専門誌に対照研究の論文を投稿すると、日本語研究に対する貢献の度合いの低さを理由に、他の学術誌への投稿を勧められることもある。対照研究をおこなう際には、「何が問題の本質か」を具体的に明らかにし、問題意識を全面的に共有するわけではない研究者にも研究の重要性が明確にわかるようにすることが重要である。

まず、「重要な問題が背後にある」と感じさせるような現象を見出す。これだけで、本人も「おもしろそうだ」と思えるし、人にもそう思ってもらえる。また、研究を通じて「背後にあるのはこういう問題である」ということを明らかにすれば、それなりにおもしろいと思ってもらえるし、本人も「この問題について考えることには意味がある」と思って研究を続けることができる。

このことを、日本人と中国人のコミュニケーションに関する興味深いエッセイである彭(2006)の次の一節を材料に考えてみよう。

日本人はものごとをはっきり言わない、断言しないとは、よく言われることだが、これは日本人が他人に対してよく気を配る、配慮するという美点を知らない一方的な物言いではないだろうか。(略)

「ちょっと都合が悪くて」「急用ができたから」「今、手がふさがっていますので」「一身上の都合で」など、まず断わる理由を先に言うのが日本式である。話し手の一番言いたいことが強くひびかないようにするために、これも「配慮表現」だ。

次のような話を聞いたことがある。

ある教授の奥さんが、教授の教え子の陳さんに京都観光の世話をしようと電話をかけた。ところが、陳さんは開口一番「あしたは行けない〜」。奥さんはやや不愉快になった。日本式では「まあ、うれしい。ただ、あしたはちょっと研究会があつて〜」となる。中国人と違って日本人の大半は、まず理由を並べてから結論を引き出す。場合によっては結論を言わないまま、理由だけで分かってもらおう、分かってくれるはずだという暗黙の了解が求められる。

そこで私は、以下のような調査をしたことがある。

(知人から明日、映画を見に行かないかと誘われた。しかし仕事があるので、一緒には行けない。この場合「行けない」理由を先に述べるか、それとも「行けない」という結論を先に述べるか)

結果は理由を先に述べると答えた日本人は 82%、中国人は 28%。これに対し、結論を先に述べる日本人は 18%、中国人は 72%であった。

この表現の順序の相違からも、日本人の断り方、否定的な意味の表現方法の一端がうかがわれ、興味深い。(彭 2006 : 33-38)

エッセイということもあり、調査方法などは書かれていないが、筆者も類似の経験があり、「誘いを断るときに結論を先に言うか、理由を先に言うか」ということは、確かにコミュニケーションについて考えるうえで重要な問題を内包していると思う。

ただし、この問題の本質について考えるためには、「物事をはっきり言う・言わない」ということについてもう少し分析的に考える必要がある。まず、上記の文章は「理由よりも結論のほうが肝心な情報である」という見方を前提にしていると思われるが、この前提は必ずしも正しくない。実際、(11)のように理由を言われれば納得できるが、(12)のように結論だけを言われてもすぐには納得できない。すぐに納得するとまじめに誘っていなかったということになるからである。日本語でも中国語でも、「行けない」と言われたら(13)のように理由を聞くのが自然である。

(11) A : 明日映画を見に行かない?

B : ごめん。明日は授業なんだ。[理由]

A : (残念そうに) そうか。わかった。また今度ね。

(12) A : 明日映画を見に行かない?

B : ごめん。明日は行けない。[結論]

A : (残念そうに) ??そうか。わかった。また今度ね。

(13) A：明日映画を見に行くんだけど、行かない？

B：ごめん。明日は行けない。[結論]

A：え、どうして？

B：明日は授業なんだ。[理由]

A：(残念そうに) そうか。わかった。また今度ね。

ここから次のように考えることができる。日本人がまず「行けない理由」を言うのは、相手の誘いを断る場面では「理由」のほうが重要な情報だからである。あわせて、理由を言えば、断りのことばを直接言わなくてもよくなる。一方、中国人がまず「行けない」と答えるのは、「行くか行かないか」を聞かれているので、それに合わせて答えている(相手が提示した選択肢の一方を指している)だけである。また、結論を先に言えば「なぜ？」と続くので、会話の量が増える。「誘いを断るときに結論を先に言う・理由を先に言う」ということには、次の二つのことが関わっているのである。

①コミュニケーションにおいて、「相手の発話に合わせて話を続ける」ことがより重視されるか、「相手が残念に思うことは言わない」ことがより重視されるか。

②「重要な情報を先に述べて話を収束させる」ことを優先するか、「相手に質問の余地を与えて話が長くするようにする」ことを優先するか。

上記のエッセイに対しては、「調査の方法は妥当か」、「調査結果を日本人と中国人の相違とみなすことは妥当か」といったことを問題にすることもできる。しかし、問題の本質について考えずに、調査の方法や結果の解釈の妥当性だけを問うても、あまり意味はない。それよりも、上記のエッセイに書かれた観察を出発点として、背景にある問題についてより具体的に考えるほうが生産的である。その結果、問題の本質が上記の2点にあることがわかれば、それをふまえて、日本人・中国人のコミュニケーションについてより具体的に観察してみようという気になるし、そのことは「中国人は物事をはっきり言うが、日本人ははっきり言わない」と言われていることを、より具体的な——より「おもしろい」と思ってもらえる——形でとらえなおすことにつながる。

上記①、②に関する相違が日本人と中国人の相違かどうか、必ずしも本質的な問題ではない。日本人と中国人の相違と言えそうであれば対照研究の形にすればよいし、男女差や性格の違いなど別の要因によると考えたほうがよさそうであれば、その線で研究をおこなえばよい。重要なのは、研究としておもしろいかどうかであり、対照研究としておもしろいかどうかではない。

言語現象の背後にある問題を見極めることは、「言語について考えるための観点」を見出すということにほかならない。筆者が対照研究をおもしろいと思うのも、言語を比べて考えることがそのような観点を見出すことにつながるからである。対照研究の発表に対して否定的なコメントがなされるのは、多くの場合、「単に比べているだけ」に見えるからである。実際には必ずしも「単に比べているだけ」ではなくても、そのように見られてしま

うこともある。そのように見られないためには、重要な問題が背後にあると感じさせる現象を見出し、問題の本質を明らかにして、仮に分析が不十分な点があっても、「さらに分析すればおもしろい研究になるかもしれない」と思わせることが重要である。

6. 個別言語研究とのコミュニケーション

対照研究は、複数の言語を視野に入れ、各言語の現象を関連づけながら考える研究である。そのことは同時に、複数の個別言語研究の世界と関係を持ちつつ研究をおこなうことを意味する。日本語と〇〇語の対照研究をおこなう場合は、日本語および〇〇語に関する先行研究を見る必要がある。また、研究を発表すれば、日本語研究と〇〇語研究の両方の立場からコメントがなされる。

個別言語研究にはそれぞれ歴史（議論の蓄積）があり、類似のテーマを扱っていても問題意識や議論のポイントが異なることがある。研究経験の浅い学生の場合は、それぞれの言語の研究について勉強すればするほど、また各言語の研究者からいろいろなコメントをもらうほど、何をどう研究すればよいかかわらなくなることがある。筆者が日本語と中国語・韓国語の対照研究をおこなう場合も、日本語研究者の視点から中国語・韓国語について考え、日本語についても中国語や韓国語と比べながら考えるので、日本語研究、中国語研究、韓国語研究の一般的な問題意識とは一致しないこともある。各言語の先行研究の知見をうまく取り込み、各言語の研究者におもしろいと思ってもらうためには一定の工夫が必要である。

個別言語研究においても、研究者の問題意識はさまざまであり、先行研究や他の研究者のコメントとうまくつきあうには、自分の見方をしっかり持ち、自分の見方と他者の見方との関連を柔軟に考えられることが必要であるが、対照研究においては、そのことがより重要な問題となる。それに対処するためには、各個別言語に関する先行研究を見るだけでなく、ふだんから異なる言語の研究者と直接話をして、彼らとのコミュニケーションに慣れることが必要である。

複数の個別言語研究の世界とうまくコミュニケーションをおこなうには、対照研究の役割と限界を自覚することも重要である。第2節で述べたように、対照研究は「〇〇語論」あるいは「『言語の普遍性と多様性』論」の一端を担うだけであり、個別言語研究の立場からは物足りない点が残るものである。第3節で紹介した井上・生越(1997)は、過去形の使用に関する日本語と韓国語の相違が「どのようなタイミングで出来事を過去扱えるか」という相違に帰着することを述べたものだが、これで「た」「-ess-」のすべての用法が説明できるわけではない。第4節で紹介した井上・黄(1998)も、日本語の「 α は？」と中国語の“ α 呢？”の相違とその背景を明らかにしているが、「は」や“呢”に関する研究としては周辺的な問題を扱ったにすぎない。しかし、これらの研究は、「た」「-ess-」, 「 α は？」 “ α 呢？”の性質とこれらの表現が内包する言語学的問題を明確な形でとらえ

ており、日本語研究、中国語研究、韓国語研究に対して一定の示唆を与えるものである。対照研究の役割と限界が自覚できていれば、個別言語研究の立場からのコメントや評価にも適切に対応できる。他人と良好な関係を築くには自分の長所と短所をそれなりに自覚していることが必要なのと同じである。

7. 言語学の教育と対照研究

ここまで次のことを述べてきた。言語の対照研究は、言語研究の一分野ではなく、言語を研究する際のスタイル・立ち位置である（第2節）。他の言語と比べて考えることは、対照研究だけでなく、個別言語研究においても重要である（第3節）。日本語研究の立場から対照研究をおこなうことは、日本語研究者の役割の一つである（第4節）。おもしろい対照研究にするためには、「何が問題の本質か」を常に考えながら研究をおこなうこと（第5節）、そして、ふだんから異なる言語の研究者と直接話をしながら研究をおこなうこと（第6節）が重要である。

これらのことをふまえ、最後に言語学の教育における対照研究の位置づけについて考えたい。ここでは、筆者にとって身近な、日本語学を専攻する留学生を指導する場合を例に考える。

留学生が日本語と自分の母語を比べて考えることは、両言語に対する理解を深めるのに役立つ。言語について分析的に考えるセンスを磨くには、内省が可能である母語について考えることが不可欠だが、留学生はそのような経験がないことが多いので、日本語と母語を比べて考えることは、それをカバーする意味もある。日本語と母語の相違に関する気づきが留学生の研究の出発点となることも多く、日本人学生がそれに興味を持つこともある。留学生が対照研究を研究テーマにするかどうかとは別に、留学生には「自分の母語ではどうか」という視点を常に持つように指導すべきである。留学生の母語について研究している研究者との交流も推奨すべきである。

一方で、留学生が対照研究を研究テーマにすることが適切かどうかは、それとは別に考える必要がある。まず、次のような考え方がありうる。

- ・言語研究のトレーニングの基礎は一つの言語をきちんと分析することであり、それができなければ対照研究もできない。また、日本語学専攻であれば、日本語の研究は責任をもって指導できるが、他の言語の分析について十分な指導ができるとは限らないので、修士論文の段階では日本語の研究を中心にするのがよい。

これに対し、筆者などは次のように考えるほうである。

- ・対照研究と個別言語研究の違いは、「他の言語と比べて考える」ことが研究の中で占める比重の違いにすぎない。教員と学生がともに言語を比べて考えることに興味があるのであれば、とりあえずそこから研究を始め、対照研究としてまとめるか、日本語の考察を中心にするかは、研究の様子を見ながら柔軟に判断すればよい。

この二つの立場は対立するものではない。留学生が対照研究を研究テーマにするのであれば、最終的に日本語に関する考察を中心にまとめる可能性も視野に入れて指導するのがよい。対照研究を研究テーマにしない場合でも、「自分の母語ではどうか」という視点を常に持って研究をするように指導すべきである。

8. おわりに

筆者は大学院では国語学専攻だったが、教員が対照研究をおこなっていた影響で、留学生も対照研究をおこなうことが多かった。中国語学専攻とも交流があったので、中国人留学生は中国語学専攻の教員ともよく話をしていた。日本人学生も留学生の話聞いて刺激を受けることが多かった。筆者にとって対照研究は大学院生のころから身近な存在だったのである。この文章で述べたことも、すべてそのような感覚にもとづくものである。研究者としての原点が学生時代の経験にあることを強く感じる。

引用文献

- 石綿敏雄・高田誠(1990)『対照言語学』おうふう
- 伊藤英人(1990)「現代朝鮮語動詞の過去テンス形式の用法について(1)－hayssta 形について－」『朝鮮学報』137, 朝鮮学会
- 井上優(1994)「いわゆる非分析的な否定疑問文をめぐって」『国立国語研究所研究報告集』15, 秀英出版
- 井上優(2001a)「日本語研究と対照研究」『日本語文法』1-1, くろしお出版
- 井上優(2001b)「現代日本語の「タ」－主文末の「タ」の意味について－」『「た」の言語学』ひつじ書房
- 井上優・生越直樹(1997)「過去形の使用に関わる語用論的要因－日本語と朝鮮語の場合－」『日本語科学』1, 国書刊行会
- 井上優・生越直樹・木村英樹(2002)「テンス・アスペクトの比較対照－日本語・朝鮮語・中国語－」『シリーズ言語科学4 対照言語学』東京大学出版会
- 井上優・黄麗華(1996)「日本語と中国語の真偽疑問文」『国語学』184, 国語学会
- 井上優・黄麗華(1998)「日本語と中国語の省略疑問文「α ハ?」「α 呢?」」『国語学』192, 国語学会
- 寺村秀夫(1982)「言語の対照的分析と記述の方法」『講座日本語学 10 外国語との対照 I』明治書院
- 彭飛 (ボン・フェイ) (2006)『日本人と中国人とのコミュニケーション－「ちょっと」はちょっと…』和泉書院